

パリでブームの「寅さん」

『週刊エコノミスト』8月9.16合併号に、興味深い対談が掲載されているので抜粋して紹介したい。リードから「芸術と文化の都・パリに「フーテンの寅さん」が「上陸」し、パリ市民を笑いあり涙ありの世界に誘っている。ブームの火付け役はパリ日本文化会館で開催中の「男はつらいよ」全50作の上映（「UN AN AVEC TORA SAN」）だ。山田洋次監督と鈴木仁館長が対談し、コロナ禍や貧困、テロや戦争などの社会課題に対し、寅さんから学べることを語り合った。



鈴木 フランスでも都市化は進んで、古くからのコミュニティが失われつつあります。寅さんの舞台となっている東京の下町・柴又の世界のような、自分に関係なくてもおせっかいを焼いたり、違う家庭の子でも自分の子のように注意したり、というのがなくなってきました。柴又の人情は何か、懐かしさを感じるだと思います。

山田 人間が孤独になっていきますね。孤独を増進させるために、コンピューターが発達しているような気がしています。誰でも簡単にスマートフォンで通話できることが、本当に幸せなことばかりなのではないでしょうか。寅さんだったらまず受け付けません。「便利」という言葉が、どんなに僕たちの暮らしを寂しくさせているのかとさえ思います。隣近所が仲良くして、時として大げんかして、また仲直りする。そんな暮らしへの共感をフランス人も持ってくれるとうれしいですね。

山田 国と国との関係で、トラブルはあると思う。たまにはコツンと頭をぶつけることもあるかもしれない。でも、寄って集って、そうじゃないこうじゃないって議論して、仲良くしていく。それぐらいのことが、どうしてできないんだろうってことです。大砲をドンと撃つというのは「それを言っちゃあおしまい」なんですね。絶対してはいけないことですね。

鈴木 寅さんはいくらけんかしても武器は持たないですもんね。

山田 せいぜい、台所にあつたにんじんを持って頭を小突くくらいですよ。

鈴木 冷戦後に「新自由主義」がもてはやされ、格差が拡大していきます。少数の「持てる者」にますます富が集中する一方、大多数の人は「持たざる者」になっている。そうすると、持っている人が偉くて、持っていない人は偉くない、といった考えをしがちです。ですが、寅さんの世界は、みんな経済的には豊かではなくとも心まで貧しくはない。だから、お金を持っていないことで人間の価値まで否定することはできません。

寅さんの世界が教えてくれることは、「新自由主義」に対するアンチテーゼではないのでしょうか。国連が掲げるSDGsでも言っている「誰一人取り残さない社会」。この発想がますます大事になってきていて、それを寅さんが、先取りしていると感じます。

(2022年8月11日)